

愛する御子の支配下に

コロサイ 1 : 1 - 14



司祭 ヨハネ 井田 泉

2022年7月10日
聖霊降臨後第5主日

敦賀基督教会にて

今日の使徒書、コロサイの信徒への手紙の初めのほうを読んでまず気づくのは、手紙の著者パウロが祈っているということです。手紙の宛先コロサイは、今のトルコの内陸部の町です。パウロはコロサイの人々のために祈っています。

「わたしたちは、いつもあなたがたのために祈り、わたしたちの主イエス・キリストの父である神に感謝しています。」

コロサイ 1:3

「感謝しています」とパウロは言うのですが、パウロはこのコロサイに行ったことはなく、また特別コロサイの信徒から世話になったというわけではありません。それなのに何が感謝なのでしょう。続きに彼はこう言っています。

「あなたがたがキリスト・イエスにおいて持っている信仰と、すべての聖なる者たちに対して抱いている愛について、聞いたからです。」 1:4

会ったことはなくても、コロサイの教会の人々が信仰と愛によって生きていと聞いたことがうれしい。そのゆえに神に感謝する。これが伝道者の思いです。

コロサイに福音を宣べ伝えたのはエパfrasという人です。7節にこう言われています。

「あなたがたは、この福音を、わたしたちと共に仕えている仲間、愛するエパfrasから学びました。」 1:7

おそらくこういうことだったと思います——エパfrasはパウロからイエス・キリストの福音を聞き、心を燃やされて故郷のコロサイに帰って伝道した。こうしてコロサイの教会が始まり、発展していきました。

そこまではよかったです、しかし今、非常に困った事態がコロサイの教会に起こっている、という話が伝わってきました。実はパウロもエパfrasも今、獄に捕らわれています。直接コロサイに行って問題の解決に当たることができません。そこでパウロは祈りつつ、心を込めてコロサイの教会の人々に手紙を書いたのです。

どういう問題がコロサイの教会に起こっていたのでしょうか。それは2章を読むとわかるのですが、間違ったことを信徒に教える人たちがいて、その結果信仰がずれてしまい、「イエス・キリスト」が曖昧になってしまっている、ということです。

たとえば、何を食べてはいけないとか、どの日は何かをするのに良いとか悪いとかいったタブーのようなものが強調されて、それに逆らえない空気です。細かいあれこれの既定を守らないと救われないかのように言われる。しかしキリストの福音はそのようなものではなかったはずです。

さらに、コロサイの教会では天使礼拝が盛んになっているということです。神やキリストをかなたに遠ざけ、天使を拝む。

天使が宇宙の秩序を支配し、人間の運命を左右するかのよう
に教えられています。しかし天使とは神に仕える僕であり、人を
助ける存在であって、礼拝の対象であるはずがありません。

心配なことに、コロサイの信徒は言わばこの世のもろもろの
霊の力に動かされて（コロサイ 2:8）、救い主イエス・キリスト
を見失っているのではないか。それでパウロはこの手紙の中で、
「キリスト」という言葉を繰り返し強調しました。ギリシア語
原典で見ると、この書簡の中で「キリスト」は 25 回（新共同訳
では 42 回）用いられています。

間違った教えに影響されているコロサイの教会の信徒のため
に、パウロは祈らずにはられませんでした。

そこでわたしたちが知りたいのは、キリストの福音とは何か、
パウロはここで何と語っているか、です。今日のコロサイ書日
課の最後の方に、それが語られています。コロサイの人々と一
緒にわたしたちもそれを聞きましょう。

「^{おんちち}御父は、わたしたちを闇の力から救い出して、その愛する
^{みこ}御子の支配下に移してくださいました。わたしたちは、この
御子によって、^{あがな}贖い、すなわち罪の赦しを得ているのです。」

コロサイ 1:13-14

ゆっくり確かめていきましょう。

第 1 に、「御父は、……してくださった」と言われています。神が何かをしてくださった。わたしたちに必要な救いのわざを、神が決定的に実行してくださった。これが大事です。キリスト教は、わたしたちが何かを考え何かを行うことから出発するものではありません。神がわたしたちのために大事な何かをしてくださった、行動してくださった、ということが出発点であり土台です。神、御父が主語です。

第 2 に、「わたしたちを」です。神は相手を考えずに、むやみに行動されたわけではありません。わたしたちに目標を定めて、わたしたちのために、わたしたちを救うために行動された。

第 3 に、「(御父は、わたしたちを) 闇の力から救い出」された。わたしたちは元々安全安心な場所にいたわけではありません。神の救いなど必要としないような、立派で満ち足りた者であったわけではありません。わたしたちは闇の中にいた。闇の力の中に捕らえられていた。しかし神はわたしたちを愛されたので、わたしたちが闇の力の中に没落したり、闇の力の道具になってしまうのを許されなかった。神はわたしたちを闇の力から救い出された。わたしたちを解放してくださったのです。

「闇の力から」と言われていますが、そこから解放されてどこへ行くのでしょうか。「(わたしたちを闇の力から救い出して、) その愛する御子の支配下に移してくださ」った。神は、わたし

たちを「闇の力」から「御子の支配下」に移してくださった。
わたしたちは、闇の勢力圏から光の勢力圏に移されたのです。

「御子の支配下」とは何でしょうか。神の御子イエス・キリストが力を持って守り、導かれる世界です。あの羊飼いと羊の譬えを思い出しましょう（ヨハネ 10:14）。羊飼いなる御子イエスは、羊であるわたしたちを愛し、守り、養い、導かれる。わたしたちは失われた者ではなく、羊飼いによって見出された者です。わたしたちは放置された者ではなく、羊飼いイエスによって保たれ支えられている者です。

「その愛する御子の支配下」と言われていました。「その」とは、「父なる神の」ということです。父なる神、御父がその子イエスを愛しておられる。その愛の充満の中におられる御子が、同じ愛の充満の中にわたしたちを囲み包んでいてくださる。これがわたしたちの置かれた場所——「御子の支配下」です。

わたしたちはなお、内と外から闇の力に攻撃され、脅かされることがあったとしても、御子の支配はわたしたちのために確立しています。それですからこう言われています。

「わたしたちは、この御子によって、贖い、すなわち罪の赦しを得ているのです。」コロサイ 1:14

イエスの力強い両手が、わたしたちをしっかりと守ってくださる。イエスのもとに引き寄せられたので、イエスの声が聞こえる。イエスのまなざしがわたしたちを温かく見つめてくださるので希望が湧いてきます。そしてイエスの願いと祈りがわたしたちに浸透してきます——み国が来ますように。み心が天に行われるとおりに、地にも行われますように（主の祈り）。

わたしたちは御子の支配下にある。イエス・キリストの愛の力のもとに守られている。今日このことを聞きました。それをおぼえていきましょう。

祈ります。

神さま、わたしたちがすでに御子・主イエスの支配のもとにあることを教えてください。わたしたちをこの世の恐れや間違った価値観から解放してください。御子イエスの願いがわたしたちの願いとなりますように。この地上にみ心が実現するために、わたしたちが生きて祈り働く者となるように導いてください。アーメン